

街の女マギー

ステイブ・クレイン作

牧草 泉

六.

ピートはマギーを見た。
「ねえ、マギー、お前の美しさには感動したよ。素敵だよ」、彼は頷きながら言った。そうして笑顔で彼女を包むように見た。

ピートはマギーが傍で耳を傾けているのを知ると、次第におしゃべりになつて、過去に経験したいろんな出来事を目を輝かせて話した。「ねえ」彼は言った。そうして変な男のことについて話した。

「あいつってイタリア野郎と同じで喧嘩好きなんだぜ。そしてやたらと単純なんだ。いいかい、あいつは自分は何かに強いんだと思ひこんでいるんだ。でも、ようやく思い違ひだとかわかつたようだ。あの野郎」

ピートは小部屋を行ったり来たりしていたが、そのせいで部屋は一層小さくなつて、その荒武者のような威厳も空威張りのようにしか見えなかつた。彼がガキツ子だつた頃

は肩を怒らせて、だれかれとなく気の弱い奴らを震え上からせた。その性癖は彼が若者になり世間を知るようになるに及ぶとますますひどくなつた。せせら笑いを浮かべて威圧する彼の言動は、怖いものは何もないことを周囲に告げていた。マギーはピートを見てびくりました。彼の周囲には何かしら重々しい雰囲気漂っていたのだ。彼女は漠然と彼が自分を見下していた教会の小塔の高さを測つてみようと思つた。

「俺は、つい先ごろ、街で一人の間抜け野郎に会つたよ」と彼は言った。「俺はその日は友人と会うつもりだつたんだ。俺が街を横切ろうとしていたら、そいつが走つてきておれにどしんとぶち当たつたんだ。するとくるりと振り向いて、俺に言うんだ、『横着なごろつき野郎』ってね。『なんだよ』と俺は言つたとき、『なんだ？ おまえ、消えつちまえ！』ってね。そうなんだ』とつとと、失せろ』つて言つたんだ。すると、奴は激昂して俺に言うんだ、『このバカ野郎』ってね。そして『地獄に落ちろつ』とまで言つたんだ。『くそつ』俺は言つたよ。『畜生！この野郎！』つてね。そして俺は奴を殴りつけたんだ。わかるだろう？」

ピートは、友人のジミーと連れ立って、意気揚々とジョンソンの家から出て行つた。

マギーは窓から身を乗り出して、街路を歩き去るピートを見つめ続けた。

まさに、暴力の世界をもともしない屈強の男が目の前にいた。真鍮で身を纏つた権力者を軽蔑してやまない男がそこにいた。彼だけが大理石のように固い法律にこぶしを振り上げて果敢に挑戦できるのだつた。彼こそはまさに騎士だつた。二人はちらちら点滅している街明かりを通り抜け、暗闇へと立ち去つた。

マギーは振り返ると、暗いほこりにまみれた壁に目をやつた。ついで家の貧弱な煤けた家具を眺めた。彼女には壊れてぼろぼろになつたニス塗りの柱時計が急に忌まわしいもののように見えた。マギーはその時計の力チカチという音が耳障りに聞こえた。色あせたじゅうたんの花模様も一層汚らしく見えた。

マギーは黒ずんだカーテンの見栄えをよくしようとして青色のリボンでちよつと飾つてみた。しかし、今となつては、何の効果もなかつた。

マギーは、ピートは今頃何を食べているのだろうと思つた。彼女は、カラーとカフスの工場を思い浮かべた。彼女にはその工場が劣悪な環境で何の希望も持てないところのように思われた。

私だつて、お金持ちで優雅な人たちと付き合つていれば、きつと、ピートのように素敵な家に住むことができるのだ。ピートは素敵な少女たちと派手に付き合つているのだろう。彼はお金を有り余るほど持つていて派手に使つているにちがいない。

マギーにとつて、この世は苦痛と屈辱そのものだつた。彼女は、そんなことをもともしない男に急に魅力を感じた。彼女は思つた、もし、ピートが恐ろしい死に神に心を捕まえられると、彼は、肩をすくめて言うはずだ「なんだつて？ そんなことなんでもないさ」と。

マギーはピートがやがて戻つてくると思つた。彼女は給料の一部で飾り用の花模様のクレトン更紗を買つた。彼女は入念に飾りを作ると、それを台所のストーブ上の少し傾いたマントルピースに飾り付けた。

マギーは、部屋の隅々まで細心の注意を払つて飾りの具合を調べた。彼女は、ジミーの友人が来る土曜の夜にその飾りが素敵に見えるようにしたかつた。しかし土曜の夜にピートはやつて来なかつた。

その後マギーは屈辱の思いで窓飾りを見つめた。彼女は今になって、ピートはすてきな飾りつけよりもはるかに素敵なんだと思うようになっていた。

数日後の夕方、それも遅く、ピートはさつぱりした身なりをしてやつてきた。以前に二度見たときは、彼はそのたびに違つた身なりをしていたので、マギーは彼の洋服ダンスは大きいのだろうとなんとなく想像したのだつた。

「おい、マギー」彼は言つた、「金曜日の夜はいい服着てろよ。お前をシヨウに連れて行ってやるぜ。どう？」

彼はちよつとばかり洋服を見せびらかして、やがて飾り付けには目もくれないで立ち去つた。

マギーは工場でカラーとカフスを作りながら、三日間というものの、仕事の合間にピートと彼の日々の状況を思い浮かべながら過ごした。そうしてピートが連れて行ってくれるという華やかな店を想像した。賑やかな歓声と音楽に包まれた会場を想像すると、マギーは自分がちっちゃなくすんだ女のように見えるのではないかと不安になった。

マギーの母は金曜日の朝からウイスキーをあおっていた。午後になると、彼女はほうりつ放しの髪をした青白い顔で、誰彼構わずののしったり家具を蹴散らしたりした。マギーが六時過ぎに帰宅すると、母親は椅子や机が散乱している部屋に横たわって寝ていた。家の機材の端切れが床一杯に散らかっていた。母親は酔った勢いで飾り付けにひどく罵声を浴びせた。それは片隅に汚物の山のように置かれていたのだった。

「なんだよ？」

彼女は急に起き上がると、不満そうに言った。「お前はどこに行っていたんだい？ どうしてもっと早く戻ってこないんだよ？ 街をぶらついていたのかい？ お前も困った女だよ」

ピートがやってきたとき、マギーは擦り切れた黒いドレスを着て、散らかった床の真ん中で彼を待っていた。窓のカーテンは荒々しい手で引きちぎられて、たった一つの留め金でだらりとぶら下がっていた。窓枠の裂け目から吹き込んでくる風にゆらゆら揺れていた。

男たちは満足そうにパイプをくゆらして、五セントや十セントや十五セント硬貨を差し出してビールを求めた。どこか他の店で買った葉巻をくゆらすような機転のきく男たちは数えるほどしかいなかった。ほとんどが終日自分の体をこき使って働いたということが一目でわかる者ばかりだった。ドイツ人たちは、奥さんと二人、三人の子供と座って静かに音楽に耳を傾けている。その表情はまるで幸福な牝牛そのものだった。

たまたま、戦艦から降りてきた海兵の一団がやってきて、小さな丸テーブルで夕刻の早いひと時を過ごしていたが、彼らの表情は健康そのものだった。時々、酔っ払った男たちが、真剣な表情で大げさな身振りでひそひそ話をしていった。

バルコニーの下のそこかしこでは女性たちが済ました顔でたたずんでいる。パワリー街の種々雑多な外国人が四方八方から笑い声をあげながらステージを見やっていた。

ピートは、突つかかるように脇の廊下を歩いていくとマギーと一緒にバルコニーの下にあるテーブルに座った。

「ビール、二杯」

後ろに寄りかかって、ピートは勝ち誇った眼差しで目の前の光景を見やっていた。彼のそんな態度にマギーはすぐく魅力を感じた。こんな状況を臆することなく見ることができ男はどんなことだつて凌げるんだと思つた。

ピートが以前にこの場所に来たことがあるのは確かだつ

ブルーのリボンの結び目は干からびた花のようだった。ストーブの火はとくに消えていた。蓋は外れていて覗き窓から見ると中にはくすんだ色の灰の山が見えた。食事の食べかすは、腐れかけた肉のように片隅に放置されていた。マギーの母親は、赤ら顔で床に寝そべっていた。そうして彼女に当り散らし、神をののしつた。

七.

黄色い衣服を着た女たちとはげ頭の男たちのオーケストラが、広いグリーン色のホール中央近くの華やかなステージで、今流行のワルツを演奏していた。そこにはたくさんの小さなテーブルがあり、その周りには人々で満員状態だった。多くのウェイターが分け入るように行き来していた。彼らはコップを乗せたお盆を運びながら、ズボンのポケットから次々に釣銭を取り出してお客に手渡していた。

フランスのシェフの衣装を着た子供たちが、ケーキを売り歩きながら、でこぼこの通路を行き来していた。周囲からは声を潜めた話し声とかすかなビールのコップの音が聞こえた。頭上にはタバコの煙が雲のように渦巻いていて、くすんだ金メッキのシャンデリアの周りを取り囲んでいた。誰もが、みんな今仕事を終えたばかりのような雰囲気だった。男たちの手にはタコまめができていて、みずぼらしい服装をしていたが、それは生活のために必死で働き続けてきたことを物語っていた。

た。だからいろいろ知っているのは当然だろう。マギーはこの事実を知って、自分が小さい存在で新参者のように思われた。

ピートはとても優しく気配りをした。彼は品位のある高尚な紳士のように振舞った。

「ねえ、どうしたんだよ？ この女に大カップを持つてくるんだ！ そんなちっぽけなのじゃ駄目なんだよ」

「そう急かせないでください、わかりました」

ウェイターが、立ち去りながら、穏やかに言った。

「なんだよ、こいつ」

ピートは、ウェイターに向かって喚いた。

マギーはピートが自分のためにも上品にしかもハイ・クラスの知識人の振る舞いをしてるのがわかった。彼女の心は温かくなった。それは彼が謙譲の美德を思い出したかのように見えたのだった。

黄色い衣装の女や禿頭の男たちのオーケストラが最初の曲の数小節を演奏した。すると、ピンクの衣装でシヨート・スカートをはいた一人の少女がステージに上がっていった。

彼女は温かい歓迎に答えるかのように観衆に微笑みかけた。そうしてステージを縦横に行き来して大げさな身振りをしながら、甲高い声で歌をうたったが、その歌詞は聞き取れなかった。

彼女が、ワンコーラスの楽しい一節をすばやく歌い始め

ると、ステージ近くの酔っ払った男たちが大はしゃぎして加わり、コップで調子よくテーブルを叩いて拍子をとった。人々は彼女を見ようと前のめりになった。そうして歌詞を聞き取ろうとした。彼女がステージから去ると拍手の嵐が巻き起こった。

前奏曲にあわせて、少女は、酔っ払いの声を潜めたざわめきの中に再び現れた。オーケストラがダンス音楽を奏で始めると、ダンサーのレースがはためき、ガス灯の光にひらひらと舞った。彼女は着かのスカートをはいているということが露になった。そのスカートのどれれもが、このステージのためのものであることは明らかだった。

時折り男が前かがみになってピンクのストッキングをまじまじと眺めた。マギーは衣装の豪華さに目を奪われてシルクの服やレースの価格を一生懸命に足し算した。

ダンサーは紋切り型の熱狂的微笑みを浮かべると、やがて彼女目当ての観客に視線を投げかけた。

フィナーレでは、彼女はグロテスクなポーズをして見せた。それは当時山の手の劇場で流行っていたのだ。そうして、特別サービスとしてパワリーの人々に貴族芝居好みの雰囲気をつくって見せたのだった。

「ねえ、ピート」マギーが、前のめりになって言った「素敵だわ」

「そうだろう」ピートはいい加減に言った。

ダンサーの後に腹話術氏が壇上に現れた。彼は不恰好な

た。周到に準備されたシーンが最後の曲の最後の一行に盛り込まれていた。

歌手は両手を広げて叫んだ。

「星条旗よ！」

たちまち聴衆の間から大歓声が沸き起こった。床を踏み鳴らすブーツの重々しい音がした。観客の目は燃え立たんばかりに輝き、節くれだつた手が一齐に空中に乱舞した。

ちよつとの間休んでから、オーケストラは再び仰々しく演奏を始めた。すると、小太りの男がステージに飛び上がった。彼はなにやら大声で歌いだすと、フットライトの前を行きつ戻りつした。そうして狂ったようにシルク・ハットをうちぶつて、観客席に媚を振りまいた。

彼は突拍子もない表情をした。それはまさに日本の風になされた悪魔のように見えた。観衆は拍手喝采した。彼の短く大きな足は一瞬とも留まることはなかった。彼は叫び喚いた。そうしてもじやもじやした髪飾りを上下に揺さぶった。観衆は笑い転げてはやし立てた。

ピートはステージのイヴェントの進行には関心がなかった。彼はビールを飲みながらマギーを見つめていた。

マギーの頬は興奮で赤らんでいて眸はきらきらと輝いていた。彼女はうれしさ一杯で心は弾んでいた。

「ねえ、マギー」ピートは言った「ショウに連れて行ってやっただからキスぐらいいいだろう？」

マギーは、びつくりして笑った。そうして彼を見ながら

人形二体を膝に抱いていた。彼はその人形に叙情的な歌をうたわせたり、土地の様子やアイルランドのことを面白おかしく解説させた。

「あの人形、本当に話してる？」

マギーは尋ねた。

「嘘だよ」ピートは言った「あれってたましなのさ、よく見るんだ」

プログラムに姉妹と書かれている二人の少女がステージに現れた。そうしてデュエットで歌った。それは教会主催のコンサートでしか聴かれないものだった。彼女らはさらにダンスをした。それはもちろん教会主催のコンサートでは見られないものだった。

二人が舞台を下がると、年齢のはつきりしない女性が黒人の歌をうたった。コーラスには、音楽と月の光のもとで、大農園で働く黒人たちを真似したと見られるグロテスクなよたよた歩きが加わった。

聴衆はそのコーラスに熱狂した。彼らは彼女を呼び戻すと、バラードをアンコールした。彼女の歌の内容は一人の母親の物語で、悲惨な状況で海を漂流する若者をうたっていた。観衆の二十人ほどの顔から、喜びに溢れた表情が消えていった。多くの人々がその歌に哀情を感じて目を伏せるのだった。

最後の締めくくりで、歌手は数行の歌詞を歌った。その歌詞はアメリカによつて滅ぼされた英国の未来を語ってい

後ずさりをした。

「駄目よ、ピート」彼女は言った「そんなこと思ったこともないわ」

「なんだよ、冷たいこというなよ」とピートが迫った。

「バカなこと言わないでよ」マギーは、いらいらしてまた言った。

「どうしても嫌なのか？」

彼はまた繰り返した。

マギーはホールに走りこむと二階へと駆け上がった。彼女は振り向くと彼を見てにこりと笑った。そしてその場を立ち去った。

ピートはゆっくり街へと歩いていった。彼の表情はちよつとびつくりしているように見えた。彼は街灯の下に立ち止まるとはつとして息をのんだ。

「うーん」彼はぼつりと言った「俺って馬鹿にされたのかな？」

(未完)